

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

## 【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究

公開シンポジウム：「<情動 sense, emotion and affect>と〈社会的なもの the social〉の交叉をめぐる人類学的研究」

日時：2014年7月5日（土）12時50分～18時10分

場所：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディアセミナー室(306)

趣旨説明（西井涼子 AA研）

発表

- 1 アート、宗教、生成（岡崎彰 一橋大学）
- 2 身体・エロス（田中雅一 京都大学）
- 3 非人間—モノ・技術（床呂郁哉 AA研）
- 4 場所性—移動と空間（内藤直樹 徳島大学）
- 5 災害・政治・生（真島一郎 AA研）

コメント

田崎英明（立教大学）、高木光太郎（青山学院大学）

参加者：約40名

## 【内容】

人間が身体として存在していること、単体では生きられない群居性動物として、社会性や共同性をすでにその身に胚胎している存在であることを出発点として、情動が人間をめぐる現象に通底することを明らかにすることを目的とする共同研究の立ち上げシンポジウムである。

「情動なるもの」は、近代西欧思想においては「理性」と対立するもの、統御すべきものとして扱われてきた。人類学もまた、西欧のエピステーメの末端に位置する諸学の一つとして、人間を人間たらしめる「理性」を動物的な「情動」の上におく階層化を暗黙のうちに受け入れてきたといえよう。

これまでの情動をめぐる人類学のパラダイムにおいては、主として情動は「感情 emotion」として議論されてきた。emotionの社会的関係的に注目し、感情(emotion)と文化(culture)の関係をめぐって議論がなされた。そこでは、情動は文化をこえて普遍的なものであるかどうか、もしくは文化によって異なる相対主義的なものであるのかどうかといった軸で展開された。社会的コンテキストにおける感情が文化によってどのように形式化されるのかといったアプローチ（文化相対主義）から、感情のemotional経験の公共、社会、認知的側面を問い直し再考する、感情を社会的行為の根底に措定する意味では普遍主義的アプローチともいえる方向へと議論が進んだ。

一方、「情動 affect」は、個体の怒りや悲しみといった通常の個人の感情に限定されず、意識や主体を超えて、フィールドに共在する身体が互いに影響しあうことで生み出される反響関係に焦点化するための概念である。そこではそもそも、「情動」と「理性」といった対立項をこえて、人やもの・環境など様々な関連性のなかでものごとが動いていくプロセスを捉えようとする視点から出発している。それは、主体やエージェントといった人

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

間の意志を起点としてものごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとくに巻き込まれていく受動性とそこから浮かび上がる生の現実を照射することを目指している。情動に着目する研究動向は、主体と客体、心と身体といった認識論的な二元論をこえて、現実を生の流れとして捉えようとするスピノザやドゥルーズに影響を受けた近年の情動論的転回 (affective turn)、「身体性の人類学」、アクター・ネットワーク論などの動向とも共振する理論的方向性をもつものといえる。

本研究では、これらの研究動向を踏まえ、個の身体性と集合の社会性の実態を解明する。それは、個に焦点化した発達心理学や認知科学的な手法とも異なり、また集合的現象への接近を主として扱う政治社会学的な手法とも異なる、ミクロとマクロな現象をとともに視野に入れて現実接近する人類学的研究手法である。

#### 1 アート、宗教、生成

岡崎に替わり、久保明教（一橋大学）が発表した。岡崎の発表内容は、「情動なるもの」を理性と対立させることなく捉え、「感覚」的経験についてサッカーの世界カップ観戦イベントの場を例に、身体の共振に焦点を合わせて再考した。

#### 2 身体・エロス

田中は、感情・官能労働において情動の相互触発性についてのナイーヴな確信が裏切られる局面を取り上げ、身体・情動・社会の関係について考察した。

#### 3 非人間—モノ・技術

床呂は、「もの」ないし非人間の存在者に関する研究という視点から情動にアプローチした。真珠養殖の技術者が稚貝に語りかけ、真珠生産業者が真珠供養を行うなど、非人間的存在への人類学的研究から情動研究に架橋する可能性を示した。

#### 4 場所性—移動と空間

内藤は、グローバリゼーションの進展によって人・モノ・情報・イメージのフローが増大するなかで、近代国家の前提にあった定住による生産と領土概念は再編を迫られ、場所は人間と非人間が織りなすネットワークの中で浮沈する動的なものとして受けとめられつつあるとする。こうした社会状況のなか、新たな人間と空間の結びつきと、そこで立ち上がる「社会的なもの」のあり方を、情動の観点から再検討した。

#### 5 災害・政治・生

真島の発表は、極限的な状況に着目し、情動の相互触発的な側面の限界性を見極めようとする。それは、「反—社会」における「社会」とは異なる「社会的なもの」や、生の極限型としての「戦争」の一手手前の小さな戦争、ならびに絶対的な孤独の一手手前の小さな孤独からの思考である。

これらの情動をめぐる研究構想のシンポジウムは、コメンテータの刺激的な触発を経て、今後のさらなる生をめぐる考察をめざすことを確認する場となった。